『比較民俗研究』19. 2003／11

特　集

コンゴ民主共和国における部族紛争と危機分析と展望

ムンシ・ロジェ・バンジラ※

はじめに

民族とナショナリティーというテーマは現代において，学問と一般社会の両分野をまきこんで重大な問題となっている。民族学について，建設的な研究がなされるようになったのは1980年代のことである。Benedict Andersonの「構造共同体Imagined Communities 1983年」をはじめ，Eric Hobsbawn と Terence Ranger の「伝統の創造1983年」などの著書があるが，これらは，今日の民族とナショナリズム研究に大きく貢献している (America Ethnologist 29, 2002年:287)。こうした努力がなされるなか，アフリカは格好な研究対象になっている。そして，アフリカの多様な民族の現実は研究対象として関心が高まっている。二，三十年前から，アフリカの現代社会のダイナミックスについて，特に国家政策との対立が目立つ地域において，多くの建設的な研究がなされてきた。Yero Paris，Frederik Barth, Abner Cohen ・Robert Bates，Ronald R. Atkison Thomas Hylland，Eriksen，John Markakis，Aletta J. Norval等　その他の著作のおかげで，この民族とナショナリズムの問題は世界で討議されるようになった（Yero Paris 1999年）。彼らはこの問題をグローバリズム，ポスト・モダニズム，などの問題とからめて述べている。

民族紛争が顕著地域や国家を中心にした。現代アフリカ社会の力学についての建設的な研究が行われているが，ここではコンゴ民主共和国のケースについて述べる。まず，初めに，再発を繰り返す民族紛争や対立の原因と背景及び同国の民族主義問題をたどってみることにする。これに加えて，より良い国家建設に向けての展望についての考察を行う。最後に，グローバリゼーションに対する見解を引き出すことにする。

※神奈川大学歴史民俗資料学研究科前期課程

第１章　コンゴ民主共和国の一般事情

コンゴ民主共和国は中央アフリカの赤道直下に位置するアフリカ大陸第３位の大きな国土である。面積は2,345km² (日本の６倍，サハラ以南アフリカで第１位)であり，首都はKinsahsaである。　コバルト，銅，亜鉛，鉄，銀，カドミウム，ゲルマニウム，ラジウム，ウラン，ボーキセイト，マンガン,マラカイト，金，工業用ダイヤモンドと宝石用ダイヤモンド，石油，材木，水力発電などの天然資源が豊富であり，非常に豊かな動物群と植物群を保持している。季節は熱帯雨林（雨期11月～４月・乾期５月～10月）である。2002年７月のコンゴ民主共和国の人口は57,000,000人である。その住民の中には200民族以上のバンツー系（大多数），ナイル系，ピグミー系（少数）等であり，そしてそれぞれの民族集団の中には様々なグループ(Sub-Ethnic Groups)が存在している。方言（linguistic variations）は400以上あり，公用語はフランス語，国民語は四つある。即ちリンガラ語，キコンゴ語，スワヒリ語，チルバ語，これらの民族集団については既に多くの研究者達によって論じられてきた。これ等の研究によると，民族集団の活力やその行動の源は，往々にしてその伝統的な多様性によるものだと報告されている。民族集団の当地では焼き畑農業が広く行われている，主な農業作物（カッサバ，トウモロコシ，カボチャ，豆など），他にも漁業，狩猟などが

営まれている。　宗教としてキリスト教(80%)；その中でローマンカトリック(50%)，プロテスタント(20%)，キンバンギスト教Kimbanguism　(10%)；そして，イスラム教(10%)；ソシテミンセックト(Syncretic Sects)とその他の伝統宗教(10%)。

コンゴ民主共和国は1908年にベルギー領になって，1960年6月30日にベルギーから独立した。カサヴブ大統領の時代コンゴ共和国と言った。1965年にモブツ氏がクーデターをおこして，1967年にコンゴ民主共和国になった。1971年に国の名前が変わりザイール国民共和国になった。1990年から1992年まで国民協議会National Conferenceが開かれたが，成功しなかった。1997年，戦争の最中にカビラ氏が大統領になり，またコンゴ民主共和国に戻った。2002年1月16日にカビラ大統領が殺害された時，彼の息子，ジョセフ　カビラが29歳でコンゴの大統領になった。

コンゴ民主共和国では，いまでも民族紛争が顕著である。それは現代の現象といえない。ほとんどのアフリカ社会の歴史や口伝承に対立と民族間の対立が登場する。さらに，植民地化される前のアフリカの民族集団が象徴的共存したが，支配層同志の対立・民族間の対立も起こった(The Annals of the America Academic 2002年:36；Obioha 2002)。

現代アフリカ社会の問題は民族間の紛争であり，深刻な問題になっている。アフリカでは(特にコンゴ民主共和国，ルワンダ，など）民族対立が続き，伝統の権限施設の破壊(destruction)をもたらした　(Ekeazor 1996年)。コンゴ民主共和国における民族紛争と危機は，民族から見ると，一体どのような問題があり，どのようにその問題を受け止め，どのようにその問題を分析すべきか，そして何をすべきかを考えてみたいと思う。

第2章　アフリカにおける民族紛争

第1節　形態や性質

現代のアフリカ社会には様々な民族間の紛争形態がある。一つは戦争である。それは政治的に民族集団の誤解から生じるものである。また社会的に土地，資源の問題も対立を招き，この紛争はだんだん避けられなくなり，連続的な敵対関係を永続させた(Osaghae1993年)。具体的に，全てのアフリカの民族紛争は公の民族紛争(Public Ethnic Conflict)である(Osaghae 1994年)。

争いは，社会的，政治的に，権力のある者が地位を保つためにおこなう意図的操作の結果か，あるいは潜在する歴史的に続いてきた様々な力，今生きている誰かの操作ではないが，人間の意識的コントロールとは別のところで働く力によっておこなわれた社会的取り決めの習慣の結果である。様々な身分は決して個人には与えられず，おもに差別され，操作され，搾取されている少数派に与えられるべきとされている。社会，経済の力であるシステムは，縁故主義として，権利剥奪，差別として非難されている。プライベートな民族紛争（Private Ethnic Conflict）や公の民族紛争が繰り返されると，アフリカ社会の発展が妨げられる (Rahushka Sheplse 1972年)。もう一つの形態はラテン(Latent)民族の特徴である(Giddens 2001年:257)。これらの民族紛争は常に激しくないが，民族集団の間に固有の憎悪を生み出す(Osaghae1994年)。コンゴ民主共和国やルワンダでの民族対立はその一つの例である。しかし，アフリカの国には民族間の紛争の秩序や強度は同じレベルにない。例えばナイジェリア，ケニア，ブルンジ，ルワンダ，ウガンダやスーダン等の民族の問題の歴史はベナン，ジンバブエやタンザニアより深刻である。最近，民族紛争はコンゴ民主共和国，ブルンジ，シェラレオーネ，リベリアなどで増加している。

第2節　アフリカにおける民族紛争の原因と要因

民族間の対立がアフリカにおいて顕著な原因を考えてみる。植民地時代以前は，歴史的にみて異なる民族集団が対立することはなく，互いに共存の道を歩んでいた(Obioha 2002年)。他の多くのアフリカ諸国同様，民族紛争が勃発したのは植民地時代以降のことであると言える。また，国家形成の危機は冷戦時代の終わりにさかのぼる。人類学や歴史的見地から，三つの重要な原因と要因があると言われている。それは構造的民族意識 (structural ethnic consciousness)，植民地性(colonial factors)と短絡な競争(unhealthy competitions)である。

構造的民族意識とは心理や社会的な事実だ。つまり，それは故意に潜在意識に人を自分の民族の経歴（言語，クラス,宗教，歴史，祖先，国民の意識など）によって同定することである(Ekeazor 1996)　その植民地管理の方針とは一体何であろう。きわめて重要な三つのポイントがあると言える。

第一に，最も重要なことは，ベルリン会議（1884－1885）後に，植民支配勢力が，民族的な領域を考慮に入れずに国境を制定したため，同一民族の居住地が二カ国にまたがるような結果を招いてしまったことである。

第二に，アフリカの王国の崩壊が，独立国家としての権力や意義を失ったことである。広大な国土を有したコンゴ民主共和国には政治的統一性はもはやなく，行政権は外国人為政者の手に委ねられることになった。

第三に，「部族主義」という言葉が入ってきたことで，アフリカ人は国家よりも，自分の属する民族に対して忠誠心を抱き，その結果として，民族同士が敵対するようになった。　そして，紛争が勃発し始めたのである。植民地支配者や人類学者の見方や言葉に翻弄されて，アフリカ人は伝統的に自らが身につけてきた生活習慣や価値観を失い始めた。さらに，植民地となって以来，資本主義と西洋化が社会的にも経済的にも導入されるようになり，アフリカの伝統的な社会構造や経済形態が変形してしまった。つまり，西洋の平等主義や個人主義の受け入れを余儀なくされて，これまでの民族中心主義，家長主義等が失われていく結果となった。元々，アフリカ社会には人々の間にはっきりとした階級があり，社会秩序を支えていたのである。ところがどの民族も平等な機会や生活を要求して，他の民族をライバルや敵とみなすようになってしまった。

植民地のリーダーは心理学的，社会学的な手法を用いて，民族対立を引き起こした(Ekaezor 1996年)。支配階級は既得権益を維持するために躍起となったが，西洋思想の影響を受けた民衆の政治的，社会的な行動，思考スタイルを目の当たりにして，大いにとまどい次第に権力を失っていった。大部分の民族集団は時として社会的な権利，土地，資源，政治的な事柄の問題によって少数の民族集団と敵対している(Osaghae1994年)。コンゴ民主共和国における民族対立はその一つの例である。今日でも経済重視の新植民地主義のもとで，ダイヤモンド，コルタン及び電子産業に関わる事業家やアフリカの政治指導者が影で操る民族紛争や革命が絶えない状態にある。

第3章　コンゴにおける民族と国家の危機

国家の独立後のコンゴ民主共和国は地域紛争，民族衝突や政争が勃発し，1960年の終わりまでには，国内は4つの準独立地域に分かれた(Cornevin　1963; Ndaywele 1997)。1998年に内戦が始まり，現在に至っている(Strauss 2002年:110)。四年間の紛争で，国家の統一と安全が脅かされている。コンゴ民主共和国も独立後は他のアフリカ諸国と同じような運命をたどっている(Ernest Gellener 1983年:81-87)。国家建設のためには優秀な政治が必要であるが，未だにそうした人材が育っていない。また物質にも恵まれていない。

多民族が共存する国家の建設が実現できない

ことが，武力闘争や民族紛争に発展する結果となる。植民地支配によって行われた民族の多様性を無視した政治形態と天然資源の経済的な搾取が現在のコンゴ民主共和国危機を招いたと言える。独立後もその状況は悪化の一途をたどり，他国からの内政干渉が続いている。だからこそ多くの研究者はアフリカのナショナリズム（民族主義）は国家を弱体化させる一方，上手に用いれば国家を強化することも可能であると言う。四年間の内戦の結果，ルワンダ，ブルンジ及びウガンダによる侵入が始まったが，紛争を止める効果的な戦略が必要とされている。

第4章　紛争終結と国家形成の見通し

第1節　宗教的文化的戦略

(a) 紛争終結の伝統的方策

紛争を終結させようとこれまでに政治努力，外交会議，宗教対話などあらゆる手段が講じられてきたが，どれも効果がなく，むしろ紛争を助長させることになった。筆者は紛争終結のためには伝統的な方策が有効あると判断している。西洋的なアプローチで臨むよりは土着の宗教や文化を通して糸口を探ることが重要ではないだろうか。

(b)共同社会，家族としての国家概念の強調

民族紛争と国家形成の問題と向き合うためには国家概念について再考する必要がある。アフリカの人々は伝統的に，民族意識が強い。それがコンゴ民主共和国の場合にも内在的力となり，未来への希望となっている。民族的，言語的な多様性が国家の統一を維持していく上での重要なカギとなる。古くからの生活様式を守るコンゴ東部のマイーマイ族の生き方はその一例である。マイーマイ族には，魔術を使って侵略者に対抗し，体に水を振りかけて敵の銃弾から身を守る。彼らはそうして外国の軍隊に侵略された先祖代々の大地を取り戻すために戦っている。少々極端な例をあげたが，一般的にアフリカの人々は共同体意識が強く，団結しているので，この独自の精神性をうまく活用さえすれば，より良い国家，建設の一助にもなると主張したいのである。これらの共同体意識が強く，団結していることについては既に多くの研究者達によって論じられた(Smith A. 2001:33-34)。

第2節　国民の編成強化

コンゴ民主共和国，その他アフリカ諸国が直面している民族と国家という重大な問題の解決策の一つは，国民編成に人々がうまく組み込まれることである。私たちはこの国民を物質的に，民族的に差別のないヒューマン・コミュニティのメンバーとして，そして自らの意志で国家とその原則に従う者として理解している。差別のないヒューマン・コミュニティをうち立てるには，他の地域に住む人々と共に暮らすため，意識的，無意識的に意見を交換し合うことができる制度を確立し，自らをひらいてゆけるような生活のセクターが必要であろう。

アフリカ独立後期において，この地域にできた形式の一つは，職業と宗教のセクター，いうなれば信仰と文化の交流のためのセクターである。このセクターをコンゴ民主共和国社会のパワーにかえてゆくことが望ましい。それらが役割を与えられれば，社会，職業と宗教のセクターは共に生活するパワーとなり，あらゆる形の攻撃から社会を守ることができる。

コンゴ民主共和国の人々はこれからこの生活のセクターをよく働かせる必要があると考えている。経験が示すように，これを行わなければ，社会，経済，政治の変化を予想するポリシーメーカーの能力のコストが高くつく。これらのセクターは，人々の日々の生活のみならず，代表者が起こす間違いを正す助けにもなろう。社会，政治的観点からみると，これはたとえば，アメリカ，フランス，イギリス，ドイツに於いて国の力の基本となっているのが，ホワイト・ハウスやエリゼー宮その他でないことがよく分かるだろう。むしろインスピレーションと，主要なる（人々の）力によって，社会を築いてゆく生活のセクターを促進させることができる。それ

故，経済界，金融界は進歩に大きな影響を及ぼす要素である。この国では，政党さえもそれらに従っている。

コンゴ民主共和国その他アフリカ諸国の問題は，そうした社会，職業及び宗教のセクターの存在をまだ知らないことである。さらに，セクターのことを知っており，彼らがなにがしかの貢献がそこにできると思われるインテリ階層は，残念なことに市民のフォーメーションに関心を示さない。人々が生活セクターへ組み込まれることによって，差別のない良いコミュニティを築くことを強調し，はっきり定義づけられた社会プロジェクトが練られない限り，アフリカの大半の国は，確信をもって民主主義を宣言することはできない。

国民編成は，精神や論理を超える計画である。これは広大で複雑な仕事であり，セクターを活性化するためには社会の研究や多くの努力が必要とされる。こうしてセクターは，はじめて正当な社会のジェネレーターとなることができる。なぜ，諸外国はアフリカのいくつかの国よりもうまく，これらの力を使っているのか。それは彼らが，次第に国家の枠を超えて（吉見俊哉2001年:86-90），危機に瀕するいくつかの事実に気づきグローバリゼーション現象の中で意味を見つけ出したからである。たとえこの現象が国境を越えても，それがある広がりを持ち，意識的に活動するメンバーを持った，よく編成された国家を破壊することはないだろう。

社会構造を再考する試み。これは市民教育団体，および都市生活セクターの支援が必要でこれは田舎の農業のように，経済的パワーを強化する，これこそがコンゴ民主共和国，その他，アフリカ諸国の国民編成のための緊急課題の一つである

第３節　　政党の積極的な役割。

伝統的な手段とは別に，国家危機を脱するためには民主主義の確立が必要と考えられる。国の行政を進めていくには政党の存在が不可欠となり，国民による対話が状況改善に役立つと考えられる。民族や地域を代表する政党は互いに国家の統一に向けて行動する必要がある。紛争解決の従来の方法とは別に，よく組織された民主主義こそが，民族対立に対処する方法として，またコンゴ民主共和国の国民編成の方法であると，筆者は考えている。この意味で，それぞれの政党は積極的かつアクティブな役割を果たすことが必要である。このためアクティブに働く政党にはいくつかの条件が求められる。

第一に，政党は国民に政治を考える刺激としての役割を果たすべきである。個人や政党が力を持ちすぎると，政治的思考を不毛にする。常に正当に政策を適切に討議することによって状況を良い方向に変えることができる。この意味で国民と対話してゆくことは，国民の意識を向上させるために必要である。こうした対話を拒む政治はすぐに廃れる。

第二に，政党が国民の中にあって，国民一致のファクターとなること，分裂の原因とならないことである。ある宗教ないし民族グループを代表してプロジェクトを宣言するような政党は，国民の一致を妨げる。言い方をかえれば，彼らは自分の宗教ないし，民族の慣習を他の人々に押し付けることによって対立をあおり，その対立を利用して自分の力を強め，他の人を犠牲にするのである。

第三に，国民社会の益となるよう，各々の政党は，国民の考え，行動をつぶすのではなく，むしろ統合させるべきである。政党をふやすという考え方は，ある種の政治思考の一貫性を崩す方向を取りがちである。さらにそのような試みは政治活動をそしてさらに適切な決定を下す力を弱めるであろう。

第四に，選挙における，政党の役割である。政党は所属している個人の選択を尊重するべきであり，あまりに政党の枠に縛るべきではない。そのためには，知識人は，選挙活動から独立した活動を行なわなくてはならない。国民は政党，組合，大学，職業，行政に対して投票を，候補

者の宗教的パーソナリティーと共に選ばなくてはならない。

第4節　国民意識の再考

その他のアフリカ諸国で紛争の要因は国籍をめぐる論議である。コンゴ民主共和国のバニアムレンゲ（ツチ族の息子）は，ルワンダ戦争後，1959年コンゴ民主共和国に亡命した。近代国家の多くの成人にとって，ただ単に帰属する必要性が見られるということを超えて，国家としての質が16世紀からずっと長い間，同質の意味を持ってきたか疑問であるし，さらに，国家建設と在住民たちの生活の広がりとの間に何か関係があるかどうかも疑問である。はっきりしているのは，近代国家が排他主義の時代に，国籍というものを重視したということである。　にもかかわらず，現代世界の，とくに文化的価値の循環をともなう，人や物の急速な変化，グローバリゼーションの風潮は複数の民族的義務，政治的相異を生み出した。

このような現実を見てくると，我々はアフリカの国籍の問題を，排他性と包括性とのあいだの緊張関係のプリズムを通して検討するようになる。その結果，こうしたアプローチには，国籍の問題を自由，平等の観点よりむしろ，必要性の観点で討論することが要求される。

第5節　公民（citizenship)の概念

国籍とは，人をある国家に再び結びつける法的関係である。その結果，権利と義務が生じるが，これらはそれぞれの国家によって大きく異なる。　この関係を結ぶ条件も様々ある。これに関して国籍は二つの面がある。この関係にあって，ナショナル　コミュニティのメンバーである人は，自分の国の人と結びつき，同じ歴史，共に暮らす意志を分け合う。この水平軸の関係は社会学的な事実である。また一方で，メンバーは政治的，法律的に，正規に認められた法律に基づく自分の国家につながっている。国家は，国際基準で権利を有すると認められる人にだけ，公民権を与えることができる。　公民権を与えるための，国家が考慮する基準は親が公民権をもつ国すなわち，血統主義，あるいは生まれた場による出生地主義の二つである。血統主義は古いシステムで，教育よりも血族関係を重視している。

これについては三つの批判が考えられる。

第一に，一つの国に属するということは，個人の独立性に任意の限界ができることを意味する。　それは均質化の試みとして表れ，人々のグループの歴史，彼ら自身の関心などの騒音を統帥する。結果的に，これがすべての人の真のパーソナリティーの妨げとなる。もちろんグローバリゼーションの中の現代文化の全体的流れとの間にはギャップが見られる。　そしてこの文化に所属する者は，記憶の領域で共通のものを持っているがゆえに，特権的対話者となる(Kang Sang-Jung &Morris Hiroshi 2002年)。

第二に，グローバリゼーションは，ほとんどの大企業を率先して国境の外へ向かわせ，最大の利益を得るために自分たちの投資のセクターを選ぶようにさせている。　こうした中で，国家というものは，もはやマーケットを広げるためのふさわしい道具ではない。　ゆえに，単一国籍(exclusive nationality)はさらなる一致を持って登場し，経済発展と人間の向上を妨げる。反対に，多国籍（plurality of nationality)は人々の幅広い活動，安全，物質その他を得るよい手段となろう。

第三に，グローバリゼーションの流れで平和，安全，環境，雇用などの総合的問題に対処するために大切なのは総合政策を行えるような国際的な連携，セクターを持つことである。国民国家(nations- states)ではまだ，急速なグローバリゼーションの結果おきた変化や困難に対応することができないからだ。

今日アフリカが直面している問題に，アフリカの人々としての自覚，自治，人間としての尊厳をいかに調和させるかというものがある。社会，政治，経済，文化的価値のグローバル化

するなかで，多様性を尊重する国家統一が望ましい。国籍や国家に対する従来の考え方を見直すグローバリゼーションの枠組みの中で，近代国家が忠誠心の複数性の存在を無視することは，もはや可能外である。人々の社会参加は，国際金融，経済（製造，加工，マーケット，雇用）にまで及び，現代国家の自然の視界を超えている。こうしたコンテクストの中で単一国籍のポリシーは有効性を失う。それは，さらなるユニティーをもつものとして現れ，経済発展，人間の開発を妨げる。反対に，多国籍は人々を幅広い行動，安全，物資その他を得る助けになる良い手段となる。

むすび

民族間の対立が地方と中央政治で顕著になっている事実を捉えるため，国家や民族の問題を扱う研究が多くなった。民族紛争が顕著な地域や国家を中心にした，現代アフリカ社会の力学についての建設的な研究が行われているが，ここではコンゴ民主共和国のケースについて述べることにした。家族のような国家，紛争解決のシステム，多民族国家，民主主義の発達，正義と平和，人類の進歩に対する取り組みを再考することが，コンゴ民主共和国の民族問題と国家形成問題の解決につながる。しかし，相反する二つの文化，即ちグローバル化と地域性の維持の両立が課題となる。これは先住民族にとっては，とりわけ深刻な問題である。しかし，対立する民族が互いに和解し，社会や教会で新たに団結することによって，正義と平和を尊重する近代的なコンゴ国家を建設することができるに違いない。最近，アフリカ連合（ＡＵ）のプロジェクトが，多くのアフリカ諸国で積極的に受け入れられている。これが紛争問題の解決への道を開き，治安，経済，産業，政治面での協力の推進を促すものとなるだろう。アフリカ連合の活発な動きとグローバル化のトレンドのなかで，コンゴ民主共和国は，民族の多様性と地域社会を尊重する統一国家を目指すべきである。

参考文献

America Ethnlogist 29 (2), 2002年:287-306.American Anthropological Association.

Anderson, B.
2000(1983) *Imagined Communities*. New York: Verso.

Cornevin, R.
1963 Histoire du Congo L_opoldville. Paris: Berger-Levrault.

Ekeazor, C.
1996 The Ethnic Factor. A Treatise and a Tale. London: New Millennium.

Gellener, E.
1983 Nations and Nationalism. New York: Cornell University Press.

Giddens, A.
2001 Sociology. Fourth Edition. Cambridge: Polity.

Kang Sang-Jung &Morris Hiroshi
[ナショナリズムの克服]株式会社,集英社, 2002年.

Ndaywele, E.N.
1997 L' histoire du Zaire. De l' h_ritage ancient a l'hége contemporain. Brussels: Ducluot.

Obioha, E.E.A.
2002 Ethnic Conflicts and the Problem of resolution in Contemporary Africa: Case for African Option and Alternatives. Nigeria: Ibadan University Press (Department of Sociology, Faculty of Social Sciences). *Cf.* www.ethnonet-africa.org/pubs/p95emeka.htm

Osaghae, E.
1993 "Manifestation of Conflict Situation in Africa", in B.W. Andah and K. Bolarinwa (eds) A celebration of Africa' s Roots and Legacy. Ibadan: Fajee Publications
1994 "Ethnicity and Its Management in Africa", in The Democratization Link. CASS Occasional Monograph, No 2, Malthouse Press.

Smith, A.
2001 Nationalism. USA: Blackwell Publishers.
Strauss, S.
2002 The Complete Idiot's Guide to World Conflicts. USA:Alpha Company
The Annals of American Academy 2002:36-47.
Yero, P. (ed)
1999 Ethnicity and Nationalism in Africa: Constructivist Reflections and Contemporary Politics. New York: St. Martin's Press.
吉見俊哉
「カルチュラル・スタディーズCultural Studies」大塚信一，2001年.

図1　アフリカ大陸
Cf. Webside: www.wonderclub.com/Atlas/cd.htm

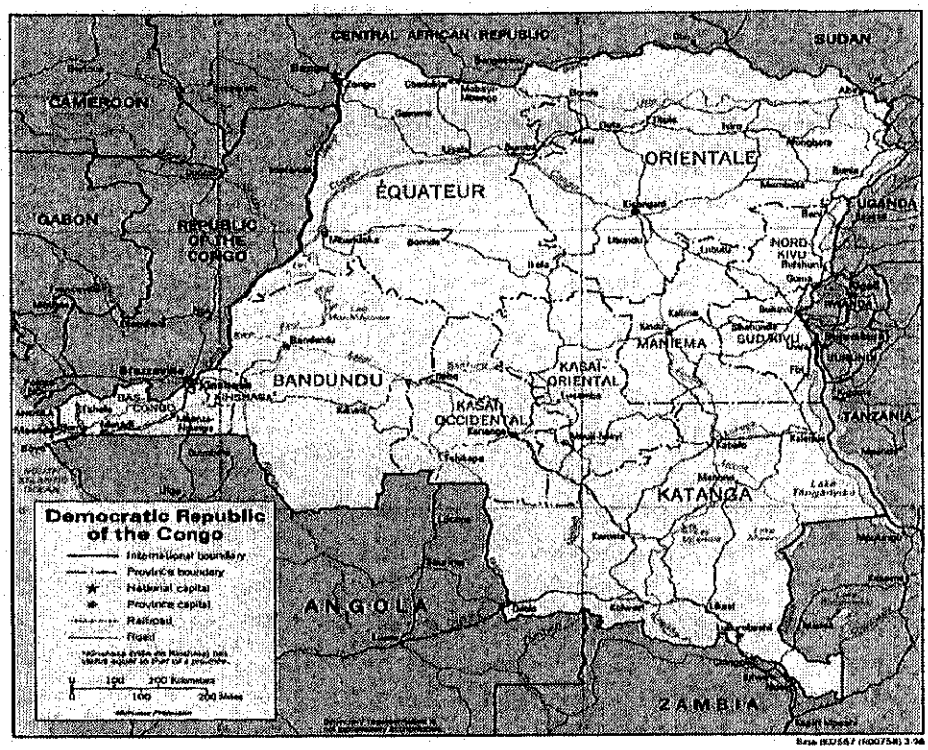

図2　コンゴ民主共和国

Cf. Perry-Castañeda Library Map Collection; Webside: www.lib.utexas.edu/Libs/PCL/Map_collection/zaire.html